

弦卷ヒビキは欲張りさん

深き森のペンギン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

弦巻財閥の御曹司、弦巻ヒビキは欲張りで欲しいと思ったものは手に入れないと気がすまない。

これは、主人公が紗夜さんに一目惚れして紗夜さんをあの手この手で落とそうとする物語です。

# 目次

第1話	ダイナミックに登場!	1
第2話	父親にもぶたれたこと無いのに	8
第3話	お互いに初めて	16



# 第1話 ダイナミックに登場！

俺、こと弦巻ヒビキは弦巻財閥の御曹司であり、天才である。

自分で自分のことを天才と言うのには根拠がある。

弱冠16歳で弦巻グループの系列の会社5つの社長をしている。

そしてその一つの会社で開発部門のチーフも担当していて、そこで開発したスマートフォンが現在世界トップシェアを誇っている。

これで証拠は十分だろう。

そして先程、父様からメールが届いた。

その文面には、

『ヒビキ、学校に通いなさい。こころが今年から通う学校に行くんだ。』

そのメールに俺は、

『めんどくさい。忙しい。同じ年の有象無象共とは関わりたくない。』

と返信する。

このメールには父様からの返信は無かった。

そして翌日。

「お兄様〜! 起きてるわね。ちようどいいわ。学校に行きましよう?」

「行かない。いくら我が愛する妹の頼みでもあんな有象無象共とは関わらない。」

「黒服の人!」

「了解しました。」

黒服が俺の体を取り押さえて服を脱がされる。

そして学校の制服らしき服を着せられる。

「ご無礼ですが、お許しください。」

「おいおい、俺を学校に行かせるだど? ふざけてるのか! 俺は絶対に行かんぞ!」

「お兄様、行きましよう?」

やめろ、こころ。そんな目で俺を見るんじゃない!

葛藤しているうちに黒服にヘリコプターに乗せられる。

俺だけ。

「どうして俺だけヘリコプターなんだ!」

「ヒビキ様はダイナミックに教室に入る方が好きだと思っただけです。」

「いや大好きだけど! つてまさかそういうことだよな?」

「そういうことでございます。」

こうしているうちにもう学校にたどり着いた。

「ヒビキ様、この教室です。窓はしっかり空いているようです。突入して大丈夫でございます。」

「有象無象がなかなかやるじゃないか。」

一方その頃。

2年B組の教室にて。

「今日から、転校生がこのクラスに來ます。皆さん、歓迎するように。おや、來たようですね。」

「え、來たってどういうことだ？」

「おい、外見ろよ！へりコプターだぞ！」

教室の中はかなりの大混乱が起こっている。

そんなことお構い無しにヒビキが教室に突入の準備を終えた。

俺は今から突入する。

へりコプターからジャンプで教室に飛び移る。

回りからは叫び声が聞こえるが、気にしない。

「どうも。弦巻ヒビキだ。お前らと馴れ合うつもりはない。俺に関わるな。」

これで誰とも関わらなくていい。

そう思った。

「ちよつと貴方!それはどういうことですか!」

「言葉通りだよ。お前らと馴れ合うつもりはない。」

「だからどうしてそんなこと言うんですか!」

なんだこいつ。

俺はこれまで何かを言えば皆逆らわなかった。

だから、気に入った。

「お前もなかなか気が強いな。気に入った。俺の女にならないか?」

「／＼いきなり何言ってるんですか!」

回りは全く状況が飲み込めていない。

なのでこの発言にも啞然としている。

「じゃあもう一度言う。お前、名前を教える。」

「氷川紗夜……ですけど。」

「氷川紗夜!俺の女になれ!」

「嫌です!こんな強引な人と!」

「いいね。益々気に入った。お前は絶対に俺の女にしてやる!覚悟しておけ。今日はこ

こまでにしよう。ではまた明日。アデュー!」

俺はヘリコプターに飛び移る。

「ヒビキ様、よかったですか？」

「ああ。構わんよ。早く家に向かえ、黒服。」

一方その頃。

教室にて。

「なんだったんだろう、今の。そういえばあの転校生、弦巻って名前だったよな。」

「まさかだけどあの弦巻？」

「あの弦巻の兄貴じゃ無いだろうな。」

「でもめちやくちやイケメンだったよね。」

「私結構タイプかも。」

男子は完全に放心状態。

女子はヒビキの容姿に盛り上がっていた。

その中で紗夜は一人で頭を抱えていた。

（何なのよ、あの人。偉そうな人だとおもったら急に俺の女になれって。理解できないわ。）

俺は今帰宅して私服に着替えている。

「黒服。今日のスケジュールを教えろ。」

「ヒビキ様、今日は学校で何もスケジュールが入っておりません。」

「そうか。わかった。俺は寝る。こころが帰ってきたら起こしてくれ。」  
「かしこまりました。では、ごゆっくり。」

こうして、俺は普段睡眠時間が少ない分よく眠ることにした。  
数時間後。

「お兄様〜! たいまいま!」

相変わらずこころが太陽のようにまぶしい笑顔を向けてくる。  
眩しすぎる。

「お帰りなさい。こころ。学校は楽しかったか?」

「ええ。とつても楽しかったわ。お兄様は?」

「俺は存外に楽しめた。あと、一人の女に、完全に惚れた。」

「それはよかったわね。お兄様! 一緒に遊びましょう?」

「いいぞ。何する?」

「楽しいことを探しに行きましょう。」

「いいぞ。黒服。服を用意してくれ。」

「かしこまりました。」

俺は服を着替えてこころと二人で外へ出掛けた。

するとうちの学校の制服を着た生徒が俺達の方を遠巻きに見ている。

「あれってあの転校生じゃない？」

「ああ、ヘリコプターに乗って現れて氷川さんに告白して颯爽と帰っていったイケメン？」

「そうそう。」

俺が注目されているのか。

悪い気はしない。

むしろいくらでも注目してくれ。

さて、俺は氷川をどうやって俺の女にするか本格的に考えるとするか。

## 第2話 父親にもぶたれたこと無いのに!

結局昨日の人はなんだったんでしよう。

そう思っているとあまり寝付けなくて少し眠気が残るがいつも通りの時間に学校に行く。

すると彼が別の人の席でゲームをしていた。

「ゲームの持ち込みは校則違反です!」

「紗夜か。今日も最高だねえ、君は。まったく。俺の女になれ。」

「嫌です!早くそれを貸しなさい!」

「ああ、紗夜もゲームしたかったのか。これは俺が作ったゲームだな。」

「貴方が作ったって、それ大手のゲーム会社のよくCMで流れてるゲーム機じゃないですか。」

「ああ。その会社は俺の会社だ。開発も俺が携わった、というかほぼ俺がやった。」

「え?」

彼が何を言っているのか理解が追い付かないわ。

つまり彼は大手ゲーム会社を所有していてこの現在世界一売れているゲーム機を製

作したと。

私と同じ年でこんなにすごい人が居たなんて。

変な人だけど。

「紗夜、携帯どんな機種使ってるんだ？」

「いきなりどうしたんですか？私はこの機種ですけど。」

私は彼に携帯の機種を教えた。

「わかってるじゃないか。そのスマホも俺の会社で俺が作った。」

嘘でしょ！

彼、少し凄すぎないかしら。

「本当ですか？」

「ああ。もちろん。驚いたか？」

「ええ。驚きました。」

「それにしても紗夜が俺の作ったスマホを使ってくれていて嬉しいよ。俺の女になれ。」

「また言ってるんですか。貴方の女になるつもりはありません！」

「そうか……紗夜、俺は紗夜しかこの人生で愛するつもりはない。そう決めたんだ。何

としても紗夜をてに入れる。」

「私を物扱いしないでください！」

「済まなかつたな。紗夜。だが俺の愛は本物だ。」

彼はやっぱり変な人だ。

これだけ断つても言い寄ってくる。

教室に皆が集まってきた。

皆遠巻きに彼のことを見てこそこそ話している。

少し気分が悪い。

まるで見世物を見るように彼のことを見ている皆に嫌気が差して私は教室を出た。

あ、ゲームの没収忘れてた。

「ねえねえ弦巻君、趣味とかある?」

有象無象が、黙っている!

正直お前らのような雑種に興味の欠片もない。

適当にあしらうか。

「趣味か。妹との楽しいこと探した。」

「例えばどんなこと?」

「いろいろだな。日によって違う。同じなのは俺の妹は天使のようだということ位かな。」

「ゲームしてるけど没収されないの?」

「なあに、欲しいならいくらでもくれてやる。」  
没収など怖くない。

データはこちらがわから干渉すればいくらでも移せるし、本体もいくらでもてに入る。

さてと、ゲームの続きでもするか。

すると、急に話しかけられた。

「あ…あの、そこ私の席なんですけど……。」

「そうなのか。知らなかった。済まなかったな。」

俺はその生徒の方を向くと、一瞬生徒の体がビクリとしたが、謝罪すると少し態度が軟化した。

「いえ、大丈夫…です。」

俺は他の生徒に俺の席を聞く。

「俺の席を教えてくださいませんか？」

「あ、弦巻君の席はそこだよ。」

一つ隣の席だった。

俺はその席でゲームを再開した。

すると先程の生徒が話しかけてきた。

「ゲーム、好きなんですか?」

「ああ、ゲームは好きだが。」

「私も…ゲームは好きです。」

「最近どんなゲームをしたんだ?」

「NFOです。」

「そうか。嬉しいよ。」

「どうして…ですか?」

「NFOは俺の会社が運営してて発案から製作まで俺がやったんだ。」

「凄い…ですね。」

「だろう? もつと言つてもいいぞ。あとNFOで何かおかしなところとかないか?」

「装備の強化の画面でアイテムの所を開いて装備を選択してから強化の画面に行くところあるじゃないですか。」

「ああ、あるな。」

「そこでまたアイテムを選択するのが二度手間だと思ふんですけど。」

「そこか。あの無能共、あんな簡単なことも出来ないのか! まあいい。修正しておくよ。」

「これからもNFOの改善点を教えてくれないか?」

「はい。」

こうして、始業のチャイムが鳴る。

授業中、あまりにも簡単過ぎる。

なのでゲームをすることしよう。

さすがにゲーム機ではまずいので、スマホでゲームをしよう。

ふと隣を見ると隣の生徒もゲームをしている。

先生は前で話すことに必死で気づく様子はない。

俺は俺お手製のワイヤレスイヤホンを着けてゲームをすることにした。

隣の生徒と目が合い、二人とも同じゲームをしていることに気付いた。

すると紙が俺の席に渡された。

その紙にはゲームのIDらしき物がかかれていた。

それをゲーム内で打ち込むと、「R i n R i n」というプレイヤーが表示された。

そしてフレンド申請する。

すると一瞬で許可された。

そこからフレンドでのルームマッチの誘いがきたのですることにした。

R i n R i n は結構強かった。

戦績は3勝2敗。

なんとか勝ち越せた。

そして昼休み。

「今度こそそのゲーム機を没収します!」

屋上でゲームをしていると紗夜がやって来た。

こんな紗夜も愛している。

「くれてやる。」

「意外と素直ですね。」

紗夜が近づいてきた。

紗夜が何かにつまずいてバランスを崩す。

「大丈夫か? 紗夜。」

「あ、ありがとうございます。」

「紗夜。お前って近くで見るとさらに美人だなあ。」

いきなりどうしたんですか／＼!

私が驚いていると、彼の顔が近付いてきた。

私の唇に彼の唇が重ねられる。

私は状況が理解出来なかった。

「紗夜。ついお前への愛が押さえきれなかった。」

「この、変態!」

俺の体が後方に吹き飛ぶ。

そして俺の頬には真っ赤な紅葉が刻み込まれた。

## 第3話 お互いに初めて

「なあ、紗夜。」

「変態は黙ってください!」

キスしただけで変態扱いか。

面白い。ますます好きになっちやうじゃないか。

それにしても、拗ねてる表情も美しい。

「その…初めてだったんですから!」

「俺も初めてだ。それにぶたれたのも初めてだ。」

「ぶつたことは、謝ります。」

「いや、構わんよ。紗夜の唇が最高だったから許す。」

「変態。」

「変態でもいいよ。紗夜への愛は変わらないから。」

「しつこいですね。」

「しつこくて結構。俺は紗夜を手に入れる。」

「どうしてそこまで私に拘るんですか?」

決まっている。

一目見て紗夜に惚れた。

紗夜なら俺に釣り合う世界で唯一無二の女だと直感で思ったからだ。

俺のような天才に釣り合う女なんて紗夜位だろう。

「一目見て紗夜に惚れた。それ以上に理由があるか？」

彼は何をいつているんだろう。

私はこれまで数々の男子に告白されてきた。

ただしそれも皆年相応に幼く、どうしようもない者だらけだった。

でも彼はどこか雰囲気が違う。

どこか強引でどこか傲慢でどこか年以上に幼い。

なのに頭がいい。というか天才だ。

先程のゲーム機や今世界トップシェアのスマホなどを一人で作り上げたのだから。

10代でこんなことが出来るなんて天才以外の何者でもない。

気づけば彼のペースに引き込まれてしまう。

まるで本に出てくる王子様のような感じだ。

容姿もどこかの国の王子様と言われても全く違和感はない。

彼のアプローチを何処か断れない自分がいた。

断りたければ彼に一切関わらなければいい。

「貴方は、全くブレませんね。」

「ブレる必要が何処にある。」

ブレる必要が何処にあると言うのだろうか。

現代社会は腐っている。

誰も自由な人間などいない。

自らの思想を表に出せば弾圧され、個性というものを嫌う。

そして大人数の有象無象がデカイ顔をして意見を通す。

こんな世界への反発か、俺は自分を曲げるつもりはない。

紗夜を俺の女にする。

そう言ったのだからもう曲げない。

「であつて二日目で貴方という人間がわかつてきた気がします。」

「俺はまだ紗夜のすべてを知らない。だから知りたい。」

彼はどうして私をここまで求めてくれるのか。

今はそれが知りたい。

案外、私達は似た者同士なのかも知れない。

お互いに互いのことを知りたいと思っている。

「そうですね。なら、どうしますか？」

「決まっている。紗夜、今日予定あるか？」

「ないですけど。」

「ちようどいい。」

紗夜の好みを探そう。

「ちようどいい。放課後何処かいかないか？」

「何処かって何処へ？」

彼は何がしたいのか、まだわからない。

わかってきた気がする、といったが分かっているのは私が気づけば彼に飲まれているということだけだ。

「それを決めるのは紗夜だよ。それが例え火の中水の中草の中森の中、何処へだって俺はいくぜ？」

「ふふっ、面白いですね。じゃあ放課後までに決めておきます。」

「ああ、頼んだ。」

紗夜のためなら何処へだって行ける。

それが例え地獄だって、天国だって、ファミレスだって変わらない。

俺は俺の道を貫くまでだ。

放課後。

「紗夜、行こうか。何処へ行くか決めたか？」

「はい。私の好きな所です。」

ファストフード店に行こう。

結局その案になったのは少し前だ。

理由は簡単。

ポテトが食べたくなくなったからだ。

「ほう、それは一体何処だ？」

「ファストフード店です。」

「ああ、スマイルバーガーか。俺が今所有している。さて、オーナーである俺が店舗の調査でも行くか。」

紗夜のいきたい所はスマイルバーガーだった。

偶然にも最近スマホで儲けた金で購入した会社だった。

オーナーとして実態調査も悪くない。

「迎えが来ている。紗夜もそれに乗るといい。」

「はい。それにしても迎えってあれじゃないですよね？」

「あれだが？」

嘘でしょ！

何でリムジンでファストフード店まで行かなければいけないの？

あと貴方オーナーだったの。

さつきから驚かさねばなしね。

「まあリムジンでファストフード店なんて目立ち過ぎる。徒歩で行こうか。」

「そうですね。そうしましょう。」

迎えが毎回リムジンはやめてほしい。

目だつてしょうがない。

俺は別にいいのだが紗夜が困りそうだ。

よって徒歩にしよう。

こうして俺達は徒歩でファストフード店に向かった。

「注文、どうする？」

「私は決まりました。」

「俺は店員におすすりめでも聞くとするか。じゃあ、行こうか。」

「そうしましょう。」

私達は列に並ぶ。

私達の番がやって来た。

「ポテトを二つ。」

「かしこまりました。」

一方隣の彼は店員さんにおすすめを聞いている。

「おい店員、おすすめを教えてください。」

「ふええ…おすすめはダブルチーズバーガーです。」

「わかった。それを頼む。」

「かしこまりました。」

こうして私達は少し待って注文を受け取った。

「ようやく来たな。少し待たせている。改善点はここか。」

「あくまでもオーナー視点なんですね。」

オーナーとしての感想もいいが、実際に味はどうだろうか。

「さて、食べてみよう。どれどれ…うん、なかなかいいじゃないか。」

ジャンクフードとはここまで旨かったのか！

いつもの料理とは違って雑さがある。

だがそこがいい！

俺の感覚ではかなり新鮮だ。

それにしても紗夜、ポテトが好きなのか。

覚えておこう。

「気に入ってもらえましたか？」

「ああ。新鮮でいいな。あとポテトを食べている時の紗夜の表情も好きだ。」

「何言ってるんですか！ 恥ずかしいです……」

「そうだ、紗夜。」

「どうしました？」

「またここに二人で来ようぜ。」

「それなら、お安いご用ですよ。」

最初は変な人だと思ったが、話してみると意外といい人だと言うことがわかった。

今私達は道を歩いている。

すると泣いている子供を発見した。

気づけば隣にいた彼はいなくなっていてその女の子に話しかけている。

「どうした？」

「猫が……木から降りられなくなってるの。お兄ちゃん、助けてあげて……」

「わかった。俺に任せろ。すぐに助けてやる。」

彼は木に上り始めた。

そして猫を抱えてすぐに降りてきた。

「もう大丈夫だ、元氣だせ。」

すると女の子は笑顔になった。

「そう、その笑顔だ。笑顔が似合うじゃないか。」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

「どういたしまして。紗夜、行こうか。」

「はい。」

きょうは、彼への印象が少し変化した日だった。